

Next Age

次世代のチーム！

国境も世代も超えて強みを提供し合い、機能する次世代の「チーム」の本質に迫る。その特徴を、チームマネジメントやメンバーシップに詳しい日本ラグビーフットボール協会・中竹竜二氏が分析する。

卓抜した「司会者」から学ぶチームマネジメント

津田大介氏といえば、多くの人が想起する姿は「金髪のジャーナリスト」である。しかしここでは、「司会者」としての津田氏に注目したい。

津田氏が司会を務めるパネルディスカッションは掛け値なく面白い。リスナーは、パネリストの言葉にときに深くうなずき、ときに思わず大笑いする。パネリストの個性がぶつかり合う、刺激的な「場」が生まれる。津田氏はなぜ、いい「場」を作り出せるのか。

まず、**パネリスト**たちの持てる力を引き出すことにとことん力を注ぐ。「**パネリスト**の強みや言いたいこともそれぞれ。最初は手探り、どうしたらこの人がこの場で生きるのか、どんな質問をしたら面白い答えが返ってくるのか、ぐるぐる頭を巡らせませす」。時間に限りはある。それでも、その人のいい部分が出てきたら深く掘り下げ、**パネリスト**同士のインタラクションで展開がより面白くなれば流れに任せるといふ。それぞれが力を発揮できたら、場を仕

切る側は「陰」に徹して創発を促す。

しかしながら、**パネリスト**によってどうしても発言の多寡が出てくる。うまくその場でパフォーマンスを挙げられない人がいるからだ。そんなとき、その人のいいところを引き出すために、角度を変えて同じ趣旨の質問をすることがある。「そうすると、1度目は言い淀んだ**パネリスト**から、2度目には、たいいてい良い答えが返ってきます」。頭の回転の速い人もそうでない人もいる。即興が得意な人もそうでない人も。大事なことは、それはその人が持っている「コンテンツ」の善し悪しにかかわらないことだ。概念なのか。経験談なのか。人によって答えやすい角度は必ずある。それが見つかれば、どんどんパフォーマンスは進化化する。

そんなことで話はまとまるのか、と思うかもしれないが、てんでばらばらでは終わらない。それも、コツがある。彼が見ているのは、最終的には**リスナー**の満足というゴールだ。「**リスナー**

今号のGUEST

津田大介氏



ジャーナリスト
メディア・アクティビスト

Tsuda Daisuke_メディアやITなどを専門分野に執筆を行う。ソーシャルメディアを利用した新しいジャーナリズムも実践。『ウェブで政治を動かす!』(朝日新書)など著書多数。

の目的はさまざま。どんな**リスナー**で、自分がその立場だったらこんなことを欲するのではないか。それを頭のどこかに置いて、**パネリスト**のどの話を盛り上げ、どの話とつないでいくのかを考えています」と言う。**パネリスト**と**リスナー**の間を行き来しながら、職人のように場を紡いでいくのである。

さて、ここで読者の方々にお願いがある。青字の**パネリスト**を「メンバー(部下)」に、赤字の**リスナー**を「顧客」に置き換えて再読いただけないだろうか? 組織の場づくりにおいて、リーダーに必要な態度が見えてくる。多くの社内会議では活発な意見が出ない。ゴールに対する意見の善し悪しではなく、声の大きさ、ポジションの高低で意思決定される……。ダイバーシティを本気で大切にしたいならば、メンバーの個性を引き出し、それが意思決定に反映されるような「場」を作ること

*本企画Web版では、「司会」と「チームマネジメント」のかかわりを津田氏と中竹氏の創発で紡ぎだしました。http://www.works-i.comの「機関誌Works」のページのリンクからご覧いただけます。

組織とは「場」の連続でできている

今回のポイントは、「ミーティングの場づくり」だけではありません。組織とは「場」の連続。1シーン、1シーンの生み出す成果の蓄積が、組織全体の成果につながります。津田さんの司会のようにゴールを常にイメージし、メンバーの個性や強みを引き出してつないでいけば、最終的なチームのパフォーマンスは極大化できます。大事なことはパネリストが気持ちよく話していること。仕事に置き換えれば、メンバーはやりたいことをやっている気持ちになっていることです。これは、一人ひとりの力を活かす、次世代のリーダーの必須条件だと思います。



中竹竜二氏

日本ラグビーフットボール協会
コーチングディレクター

Nakatake Ryuji_早稲田大学人間科学部卒業後、渡英。レスター大学大学院社会学修士課程修了。三菱総合研究所を経て、早稲田大学ラグビー蹴球部監督、ラグビーU20日本代表監督を歴任。フォロワーシップ論の提唱者の1人。